

うらうすぶんの 1人／浦白の夢

私たちが浦白の誇らしさを特産品の風や風景が数多くあります。浦白の誇らしさを特産品の風や風景が数多くあります。浦白の誇らしさを特産品の風や風景が数多くあります。



宮野 政幸 さん

雪道をひらく、暮らしを守る。
自分の町だから続けていく。

地で三十年以上働いています

生まれも育ちも浦白です。十代後半は町外に出て板金や食品工場、設備屋で働いていました。でも、十七歳になる直前に家業の宮野商事に戻ってきて、それから三十年以上ずっとここでやっています。帰ってすぐ子どももできて、もう迷う暇もなかったですね。

祖父が始めた宮野商事の仕事は主に、ガソリンスタンドと除雪です。ガソリンスタンドの仕事は、なくなれば町の人はずっと困ります。車も農機具も、燃料がなければ動かない。町に一軒もなければ、灯油を取りに行くだけでも大変です。冬は灯油の配達も必須。だから「これは守らなきゃいけない」

とと思っています。自分の町だから、自分がやらなきゃと。

大雪に挑む仕事は楽しい。
地域の子どもの見守りたい

除雪も同じです。毎年冬になると、朝は三時から始まります。今年は一時半から出る予定です。そのままガソリンスタンドを開けて、帰って少し寝て、また動く。

地域インフラを支えているなんて大きさに思っているはいません。僕は単純に機械に乗っているのが好きなんです。きれいに雪はねして雪道がひらいたときの爽快さはいいものですよ。それがあるから続けられています。

でも、ただ好きでやっているだけじゃなくて、やっぱり地域の人のことを思い浮かべています。

たとえば子どもがいる家のこと。大雪の朝の子ども登校は大変です。自分も子どもの頃、胸のあたりまで積もる雪をかき分けて登校するのが本当に嫌でした。子どもたちをそんな目にあわせたくない。家の出入り口は七時までに終わらせるようにしています。自分が逆の立場だったら怒りますから。長靴のなかに雪が入って身体が冷えてかじかみながら子どもが登校するなんてのは、かわいそうで、嫌ですからね。

自分も支えられた。
だから自分が支えていく

ガソリンスタンドの仕事も、やっぱりライフラインを支える責任があります。真冬にガス欠した人のところへ燃料を届けに行ったり、夜中に車が道に落ちた人を助けに行ったり。いつも給油しに来てくれるお客さんじゃなくとも結局行ってしまいます。まあ、自分も逆に助けてもらうことがあるから、お互いさまで。地元っていうのはそういうものだと思います。

浦白は自分のふるさとで、やっぱり好きな場所です。若い頃札幌に住んだときには遊ぶには楽しいけど、住む場所ではないと思いました。ここに続けるべき家業があったから、自分の居場所もあった。もしサラリーマンの家だったら違ったかもしれません。

浦白にいれば受け止めてもらえる。それがありがたいと思っています。

子育てもそうです。若い頃の子育てはたくさんの人に助けってもらってききました。最近になってようやく、それが「当たり前じゃなくて恵まれていたんだ」と気づきました。そう思うと幸せだし、僕も同じように地域の子どものたちを見守っていききたい。

派手なことをやっているわけではありませんが、ガソリンを入れて、除雪をして、困っている人がいたら助ける。ただそれが続けてきただけです。でも、それが町にとって必要なことなら、これからもやっています。自分です。

宮野 政幸 (みやの まさゆき) さん ● 1976年生まれ。浦白町出身。祖父の代から続く燃料供給、除雪を請け負う宮野商事を34歳で引き継ぎ、代表取締役。浦白町商工会理事。子どもは成人した長男・長女と、年の離れた年長(こども園らいおん組)の次女がいる。園児の次女と浦白での子育てでセカンドシーズンを満喫中。

王子江 水墨画教室・絵画展開催

【楽しい水墨画教室】



9月17日（水）小学校にて小学3年生から中学生、一般の方を対象に水墨画教室が開催されました。王子江先生の見事な筆さばきを見学したあと、実際に参加者も筆をとって水墨画に挑戦しました。



【絵画展】



9月18日（木）から9月28日（日）の期間で多世代交流施設えみるにて王子江絵画展が開催されました。

開催初日のオープニングイベントでは福本ゆめさんらによる二胡の演奏会が行われ、やさしい音色が会場を包み心あたたまるひとときとなりました。

